東国の雄 総社古墳群

文政二年己卯十一月四日群馬郡植野村々民十三名ニテ字二子山古墳ヲ發掘シ兄ニ大小カ劔三口ヲ發見シ文政七年甲申歳青梨子村山口又太郎京都ニ出テ一口ノ寶劔「劔大明神」ノ神號ヲ受ク、爾來里民ノ尊崇スル所トナル。此圖ハ當時十二枚ヲ現品ト等シク偽生シテ有志間ニ頒布シタリ。此ノ圖ハ總社町大字植野立見貢氏ノ所藏ニ係ル一軸ナリ。今回本館ニテ之ヲ借リ受ケ館員保岡春江氏ヲシテ筆寫セシメタリ。

維時大正十年四月二十四日

前橋市立圖書館

総社二子山古墳出土
頭椎大刀柄頭

榛名山東南麓に広がる古墳郡

総社古墳群は、東南方向に広がる榛名山の裾野の末端、現利根川の西岸に南北約 4km に分布する古墳群です。総社古墳群は、その規模や卓越した築造技術、優美な出土品などから、古くから注目されており、東国を代表する古墳群の一つに数えられます。現在は前方後円墳 3 基、方墳 3 基、円墳 3 基が残されています。

大型古墳の分布を見ると、その立地から南北二群に分けられ、南支群には王山古墳・王河原山古墳（消滅）、北支群には遠見山古墳・総社二子山古墳・愛宕山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳があります。

古墳の移り変わりとしては、まず 5 世紀後半に北支群に遠見山古墳が築かれ、その後 6 世紀初頭に南支群の王山古墳や、横穴式石室を持っていたと考えられる王河原山古墳が続きます。以降は北支群で大型古墳が造られ、総社二子山古墳（6 世紀後半）⇒愛宕山古墳（7 世紀前半）⇒宝塔山古墳（7 世紀中葉）⇒蛇穴山古墳（7 世紀後半）へとうつりかわります。

総社古墳群の分布

総社古墳群の変遷

遠見山古墳（前橋市指定史跡）

【所在地】前橋市総社町総社給人城川 1410
【形状】前方後円墳
【時期】5 世紀後半
【墳丘全長】88m（推定）
（後円部径：50m　前方部幅：55m）

遠見山古墳全景（南東より）

遠見山古墳は墳丘全長 80m を超える大型の前方後円墳です。これまで数度調査が行われ、墳丘の裾や墳丘を巡る周堀が確認されています。主体部は竪穴式石室と考えられます。円筒埴輪などが出土しており、周辺では人物埴輪なども採集されています。周堀の底には 6 世紀初頭の榛名山の噴火で噴出した火山灰が積もっており、出土した埴輪の年代などから、古墳の築造時期は 5 世紀後半と考えられ、総社古墳群の中で最も古い古墳です。本古墳はこの地域の開発に成功した豪族の墓と考えられます。

墳丘測量図

王山古墳（前橋市指定史跡）

王山古墳全景（西より）

【所在地】前橋市大渡町一丁目6-1
【形状】前方後円墳
【時期】6世紀初頭

【規模】墳丘全長75.6m（後円部径：50m・前方部幅：63.1m）
石室全長：16.37m
（羨道12m・玄室4.37m）

王山古墳は墳丘全長75.6mを測る大型の前方後円墳で、6世紀初頭に造られたと考えられます。昭和47～48年に墳丘全体が調査され、古墳の様子が明らかになりました。墳丘の築造方法としては、まず盛土で二段に墳丘の形を作った後、その外側に砂や礫が混じった川原石を詰め、さらに外面に大ぶりな自然石の葺石で飾ります。死者を埋葬する主体部は横穴式石室で、後円部の基壇上につくります。石室の全長が16m以上と非常に細長く、玄室は赤く塗られていました。

墳丘測量図

墳丘に葺かれた葺石の様子

石室の様子（入口より）

石室実測図

出土品には円筒埴輪や、大刀・盾といった器財埴輪のほか、矢を持ち歩くための容器である胡籙の出土が注目されます。

本古墳は横穴式石室という新しい埋葬方法を採用しており、東日本でも最も古いものの一つです。初期の横穴式石室を持つ群馬県内の古墳としては、前二子古墳（前橋市）や築瀬二子塚古墳（安中市）などがあります。横穴式石室は畿内のヤマト王権で取り入れられた新しい葬制で、これをいち早く取り入れた群馬県中西部の豪族たちは、中央と強いつながりを持っており、先進的な技術や文物を取り入れることができたと考えられます。

初期の横穴式石室の分布

前二子古墳石室

築瀬二子塚古墳石室

①王山古墳　②正円寺古墳　③前二子古墳
④築瀬二子塚古墳　⑤一之宮4号墳
⑥八幡二子塚古墳

そうじゃふたごやまこふん

総社二子山古墳（国指定史跡）

総社二子山古墳全景

【所在地】前橋市総社町植野３６８
【形状】前方後円墳
【時期】６世紀後半
【規模】
墳丘全長約 90m（後円部径 45m、前方部幅 61m）
後円部石室　石室全長 9.4m（残存値）、玄室長 6.8m
前方部石室　石室全長 8.7m、玄室長 4.2m

総社二子山古墳は現状の墳丘全長で 90m を超える大型の前方後円墳で、総社古墳群の中でも最大規模を誇ります。未調査のため墳丘の詳細な構造は不明ですが、二段築成で、墳丘斜面に葺石を葺き、墳丘全体に円筒埴輪が立てられていたとみられます。

石室は後円部・前方部の 2 カ所に造られています。後円部石室は天井が崩落しているものの、県内でも最大級のものです。壁面は榛名山から噴出した角閃石安山岩を加工して巧みに積み上げています。前方部石室は、大ぶりな自然石を積み上げており、石室の規模も後円部石室より一回り小さな石室です。墳丘の形や石室の作り方などから、後円部石室⇒前方部石室の順で造られ、両石室とも 6 世紀後半に築かれたと考えられます。

後円部石室の様子
（田澤金吾「上野国総社二子山古墳の調査」吉川弘文館より）

後円部石室実測図

前方部石室の様子

前方部石室実測図

副葬品の様相は明らかではありませんが、前方部石室から勾玉や耳環、刀子、大刀などが出土していることが知られてます。特に頭椎大刀は、原品の所在が不明ですが詳細な絵図が残されていて、様々な装飾が凝らされた非常に優美な大刀であったことが分かります。また、その形状や作りなど、高崎市綿貫観音山古墳出土の大刀と非常によく似てしています。

総社二子山古墳出土刀剣実測図（前橋市立図書館所蔵）

愛宕山古墳（あたごやまこふん）

【所在地】前橋市総社町総社 1763 ほか
【形状】方墳
【時期】７世紀前半
【規模】
墳丘全長 56m（推定）、墳丘高 8.5m
石室全長 9.28m（残存値）、玄室長 7.1m

愛宕山古墳は墳丘全長 56m の方墳（ほうふん）で、７世紀前半の築造と考えられます。これまでの前方後円墳（ぜんぽうこうえんふん）が姿を消して方墳という四角い形状の古墳になります。墳丘部は未調査ですが、二段築成で、墳丘斜面には葺石（ふきいし）で飾られていたと考えられます。また、墳丘に埴輪（はにわ）は立てられていなかったとみられます。

石室は巨大な自然石を積み上げた石室で、羨道（せんどう）が土砂で埋まっているため、石室全体の規模は不明ですが、玄室長で約 7m を測る巨大な石室です。壁面の自然石も、部分的な加工が行われていると考えられ、石室を造る技術が進歩していることがわかります。また玄室の奥壁（おくへき）寄り中央には、精巧（せいこう）なつくりの凝灰岩（ぎょうかいがんせい）製の刳抜式家形石棺（くりぬきしきいえがたせっかん）が置かれています。

墳丘測量図

愛宕山古墳の石室と石棺の様子

刳抜式家形石棺は畿内（きない）でも有力者の古墳に採用される例が多く、東日本全体でも宝塔山古墳の家形石棺を含めてわずか数例を数えるのみです。

石室実測図

家形石棺実測図

宝塔山古墳（国指定史跡）

宝塔山古墳全景（北より）

【所在地】前橋市総社町総社 1606
【形状】方墳
【時期】７世紀中葉
【規模】
墳丘全長約 60m、墳丘高 12m
石室全長 12.04m
（羨道長 3.56m、前室長 3.9m、
玄室長 3.32m）

宝塔山古墳は墳丘全長約 60m の大型方墳で、7 世紀半ばに造られたと考えられます。墳丘は三段築成で、斜面には葺石が葺かれていたと考えられます。石室は墳丘の基壇上に造られ、南側に向けて開口しています。石室は羨道・前室・玄室からなり、それぞれの入口には門柱状の施設が設けられています。

石室は、前代の愛宕山古墳までの自然石を積み上げる石室の作り方から、きれいに加工された切石を巧みに積み上げる「截石切組積」という手法が採用されています。

更にその上に漆喰を厚く塗って石室全体を白く平らに仕上げています。玄室の中央には輝石安山岩製の刳抜式家形石棺が置かれています。愛宕山古墳の家形石棺同様非常に精巧な造りの石棺で、底面付近には装飾として格狭間が刳り込まれています。

墳丘測量図

宝塔山古墳石室内の様子

石室実測図

巧みに組まれた石材

石室に残る漆喰

石室壁面の石材の精緻な加工と、これを積み上げる技術、漆喰の使用などは、畿内の有力者層の古墳に用いる技術そのままと言えます。また、石棺の脚部に彫り込まれた格狭間は、大阪府南河内郡太子町聖徳太子墓の棺台などに見られるものと同一のものと考えられ、古墳の埋葬施設に、新しい文化である仏教文化の影響が及んだ結果と言えるでしょう。

家形石棺実測図

玄室と石棺の様子

蛇穴山古墳（国指定史跡）

蛇穴山古墳全景（南より）

【所在地】前橋市総社町総社 1587-2
【形状】方墳
【時期】７世紀後半
【規模】
墳丘全長約 40m、墳丘高 5m
玄室長３m、玄室幅 2.6m

中堤（内側）の貼石（コーナー部分）

中堤（内側）の貼石

中堤（外側）の貼石

墳丘墓壇の様子

蛇穴山古墳は墳丘の一辺が約 40m の方墳で、７世紀後半の築造と考えられます。墳丘は二段築成で、墳丘斜面には葺石で飾られていたと考えられます。墳丘の周囲には内堀が巡り、その外側に貼石を施した中堤を挟み、更にその外側に外周溝を巡らせて、二重の堀で墳丘を取り囲んでいました。

石室は南側に向かって開き、石室前には川原石を敷いた前庭を持ちます。蛇穴山古墳はそれまでのような長い羨道を持たず、わずかに切石を敷いたスペースからすぐ奥に玄室を配置します。玄室入口の天井部分には格狭間状の刳り込みが施されています。

墳丘測量図

蛇穴山古墳石室

玄室は両側壁・奥壁・天井石がそれぞれ一石の巨石で構成され、周囲を削って巧みに石材を組み合わせるなど、高度な石材加工技術が見られます。宝塔山古墳同様石室には漆喰が塗られており、石室全体を平滑に白く仕上げています。玄室の奥壁付近には牛伏砂岩製の大きな切石が置かれており、棺を安置するための棺台と考えられます。

石室実測図

玄室に置かれた棺台

石室内の漆喰の様子

～幻の白鳳寺院～山王廃寺（国指定史跡）

心柱を飾る根巻石

石製鴟尾（左：日枝神社、右：個人宅）

出土した軒丸瓦

「放光寺」銘瓦

出土した軒丸瓦

総社古墳群から南西に１kmほどの場所には、古代寺院である山王廃寺があります。

山王廃寺は、大正時代に塔の心柱を受ける塔心礎が偶然発見されたことによりその存在が明らかとなり、昭和３年には国史跡に指定されました。塔心礎発見後も大棟を飾る鴟尾や、心柱の根元を飾る蓮華をかたどった根巻石などの石製美術、塔の初層を華やかに彩る塑像群、当時の高級食器である緑釉や三彩の陶器、宝相華文を刻んだ金銅製飾り金具などが次々と発見されるなど、畿内の有力寺院にも匹敵する古代上野国を代表する寺院であったことが判明しました。

また、昭和５４年の第六次調査において、「放光寺」とヘラで描かれた瓦や「放光」のスタンプが押捺された瓦が出土したことから、高崎市山名町の山上碑や「上野国交代実録帳」に見られる「放光寺」は山王廃寺を指し、山王廃寺の寺号が「放光寺」であったとする見解が有力となっています。

これまでの調査で大量に出土した瓦などから、寺院の創建は７世紀後半にさかのぼると考えられます。

山王廃寺から出土した優美な石造物は、総社古墳群構築と共通した高度な石材加工技術を駆使したもので、寺院の創建時期も考え合わせると、山王廃寺の造営に当たっては、総社古墳群を築造した有力な豪族が大きく関与していたと考えられます。

出土した塑像群

緑釉陶器一括資料（群馬県立歴史博物館所蔵）

金銅製飾金具

あきもとし　てんぐいわようすい

秋元氏と天狗岩用水

【秋元氏と総社】

慶長５年（1600）、関ヶ原の戦いにより徳川家康の天下経営が現実味を帯びる中、家康は江戸城周辺の関東諸城に腹心の臣下を城主として配置しました。秋元長朝は、関ヶ原の戦功によって総社領６千石を与えられ、はじめて大名となりました。秋元氏が総社藩を治めたのは、長朝・泰朝の二代わずか３３年ですが、その短い間に総社の地の基礎を築きました。

天狗岩用水（前橋市総社町）

【天狗岩用水の開削】

秋元長朝は、慶長６年（1601）に総社入封後、総社城の築城や城下町の建設など数々の事業を行いました。特に、天狗岩用水の開削は非常に大規模な工事でしたが、領民たちの協力を得て３年後には通水に成功しました。その後新田開発を行うなど領内の石高の増加に努め、六千石の藩を一万石の豊かな土地へと変えました。

力田遺愛碑（光巌寺）

【力田遺愛碑】

秋元氏の菩提寺である光巌寺の境内には、秋元氏と総社領民の強いきずなを示す碑が残されています。力田遺愛碑は、秋元氏が総社から転封して 100 年以上経った安永５年（1776）に建立された石碑で、領民が秋元氏の功績を碑に刻んで後世に伝えたものです。転封後もなお慕われた領主と領民の強いつながりを表しています。

東国の雄 総社古墳群

平成２８年２月２９日発行

前橋市教育委員会事務局文化財保護課

〒371-0853　前橋市総社町三丁目 11-4

電話 027-280-6511

Ｅメール　bunkazai@city.maebashi.gunma.jp